

共同研究プロジェクト

メディア・社会心理研究の有機的統合に関する共同研究

活動報告

佐藤 知久・長崎 励朗

本プロジェクトの目的は、新設されたメディア・社会心理コースの本学における位置づけを確認するとともに、学際的研究の基礎を確立することにある。そのため、今年度はメディア・社会心理において専門科目の中核を担う教員の元指導教官を招いた研究会を企画した。

今回、お招きしたのは、社会心理学の浅井暢子教員の指導教官である唐澤穰氏である。唐澤氏には、集団アイデンティティーの問題を社会心理学がどのように扱うかについて、講演していただいた。講演は、社会心理学において集団アイデンティティーが研究された最初の例まで遡って学説史的な議論を紹介しつつ、徐々に最新の研究にまで話を広げるという展開を見せた。社会心理学における集団アイデンティティーの研究は「人間にとって内集団/外集団という感覚がどの程度重要であるか？」という基礎的な問いに焦点を当てたものから、徐々に愛国心(Nationalism)や愛郷心(Patriotism)、国際主義(Internationalism)などに関する応用的なものへと発展していったという。

集団アイデンティティー研究における最初期の実験では、被験者たちをとくに意味のない2グループに分け、2つのグループのあいだで報酬を分配させるという課題を課した。この実験からは被験者たちが自身の属するグループと他のグループとの間に差をつけようとする、いわゆる「えこひいき」の構造を抽出することができたという。この種の研究から発展したナショナリズム研究は、主に欧米で盛んにおこなわれ

ている。その手法を日本に持ち込み、実際に研究を進めている唐澤氏は、その方法論における難しさを強調する。質問紙のワーディング1つとっても、日本人と欧米人の間には溝が深い。また、そもそもNationalismとPatriotismを日本人が分離して考えているかどうか。そういった手法面の議論をするだけでも、他分野の研究との関係性が浮き彫りになってくる。とくに、ナショナリズムの問題は、他分野でも興味の対象となることが多いのに加え、昨今の社会情勢とも深くかかわっているため、全員の興味関心の結節点として作用したといえる。

研究会は発表の途中でドンドン質問してよいとする形式をとったため、2時間の間に十分に議論を尽くすことができた。参加者がメディア論や社会学、思想哲学、政治学、文化人類学などの視点から様々な質問を投げかけたことで、本プロジェクトが目指す異分野の有機的統合にも寄与したと考えられる。人数は少なかったものの、プロジェクトの目的を十分に踏まえた意義深い研究会となった。

このような企画はシリーズとして計画しているため、次年度はメディア論の長崎励朗教員の元指導教官である佐藤卓己氏をお招きしてメディア論に関する講義をしていただくことを予定している。各教員が、互いの核となっている専門性を理解し、敬意を抱きあうことによって、本プロジェクトの最終目標である共著執筆が可能になることが今後、期待される。